

「有機分子触媒による未来型分子変換」領域代表

## 寺田 眞浩 東北大学教授



## 日本プロセス化学会など

日本プロセス化学会と新学術領域研究「有機分子触媒による未来型分子変換」との合同シンポジウムが、11月28、29日の両日に渡り、仙台市・仙台市民会館において開催される。産学連携の懸け橋」として、企業、大学関係者、学生など各方面から多数の参加が見込まれている。

寺田眞浩領域代表（東北大学大学院理学研究科教授）に今回の合同シンポジウム開催の狙いなどを語ってもらった。

### 合同シンポジウム開催

# 産学連携の懸け橋に

プロセス化学は医薬・農業など、有機合成品の創製で品質や経済性、環境保全、安全性など、実用化段階におけるコア技術として重要視されている。このプロセス化学にスポットをあて、産学の壁をなくし、研究者を横断的に結びつけるユニークな取り組みをしているのが日本プロセス化学会である。富岡清会長（同志社女子大学薬学部教授）のもと、学術的・学際的な水準向上を目的として、これまで夏冬と年2回のシンポジウムを開催。産学のみならず、企業間の情報共有の場を提供してきたが、来年は創

設から12周年を迎えようとしている。一方、プロセス化学の新たな方法論として、脚光を浴びているのが有機分子触媒だ。金属錯体触媒や生体触媒（酵素）に次ぐ第三の触媒として、2000年を前後して急速に発展している分野とい

える。そもそも有機分子触媒（Organocatalyst）は、高価であるが、50人の国内の研究者が集い、それぞれ独自の切り口から「有機分子触媒」の学術的な発展と裾野の拡大を目指している。研究者間の垣根を低くすることで共同研究を奨励し、多角的な視点に基づき、研究を進める一方、次

世代の育成を目的に若手研究者の発表機会を設けるなど、これまで年数回のシンポジウムやセミナーを開催してきた。今回、仙台で開催される合同シンポジウムでは、約400人の参加が見込まれ、企業からの参加は約半数に上るとみられる。有機分子触媒はその潜在的な有用性が着目されてから十数年が経とうとしているが、学術研究をいかに実用化に結び付けるかが今後の課題だ。実用化に向けた取り組みはごく限られており、この合同シンポジウムが産学をより強く結びつける懸け橋として、さらには真に力量ある有機分子触媒の開発へとつながるきっかけとなることを期待している。

## 有機分子触媒、実用化へ

学的・科学研究費補助金がスタートした。現在、約50人の国内の研究者が集い、それぞれ独自の切り口から「有機分子触媒」の学術的な発展と裾野の拡大を目指している。研究者間の垣根を低くすることで共同研究を奨励し、多角的な視点に基づき、研究を進める一方、次

世代の育成を目的に若手研究者の発表機会を設けるなど、これまで年数回のシンポジウムやセミナーを開催してきた。今回、仙台で開催される合同シンポジウムでは、約400人の参加が見込まれ、企業からの参加は約半数に上るとみられる。有機分子触媒はその潜在的な有用性が着目されてから十数年が経とうとしているが、学術研究をいかに実用化に結び付けるかが今後の課題だ。実用化に向けた取り組みはごく限られており、この合同シンポジウムが産学をより強く結びつける懸け橋として、さらには真に力量ある有機分子触媒の開発へとつながるきっかけとなることを期待している。